

コミュニケーション研究会 第6次テーマ「日本の教育に関する提言」

『日本における語学教育はどうあるべきか』

山 本 善 行

平成26年11月

日本における語学教育とはどうあるべきか

山本 義行

本来、言語はコミュニケーションの手段である。このグローバル化の時代、外国人と直接のコミュニケーションが必要とされるにもかかわらず、日本人であっても殆どの人が英語を学校で学んだくせに、実際に英語でコミュニケーションのとれる人は非常に限られている。中学で3年、高校でも3年、大学まで行けばさらにもう2年、計8年間も学んでいるはずなのに。

小生の場合も、ご多分にもれず、大学卒業の時点で、英語で、読むことは出来ても、聞いたり、話したりすることは殆ど出来なかった。日常会話程度が出来ようになったのは、就職して、会社の自主研修などを通じてであった。特に、英語を仕事で使うこともなかったが、定年後に始めた技術翻訳で英語を日常的に使うようになった今でも、会話となるとどうしても身構えてしまってスムーズとまではいかない。

ところが、仏語となると、大学でたった2年間、第2外国語で学んだだけで、特に、仕事で日常的に使うこともなかったのに、定年後であっても、何故か日常会話は英語よりも仏語の方がスムーズに体になじむのだ。その理由の一端をこれからご紹介することにし、日本人のこれからの語学教育の一考にして頂ければ幸いである。

小生は35歳のころに、幸か不幸か、業務上の必要性で、突然、仏語の特訓を現地で半年間受ける機会が与えられたのである。アルジェリアのプロジェクトには英語でなく仏語でなくては通用しないという理由で、その要員養成のために与えられた機会であった。当時の小生にとっては、このつらい研修を受けた上に、「ここは地の果て」までと歌われたアルジェリアへの派遣に怯えて（大げさ）いたので、いささか不幸な出来事であったかも知れない。しかし、そのプロジェクトは数年で頓挫したので、出張程度だけで済み、今となつては仏語を覚えさせて貰っただけ幸いであったと言える。

この特訓を受けるため、フランスの西、イギリスに近いラ・ロッシュェルという古い港町の駅に降り立ったのは日本人総勢10名ほどであった。この町で、各自、別々にホームステイしながら、朝9時から午後17時まで昼休みの2時間を除き毎日、土日を除く半年間、特訓のため学校に通ったのである。田舎町なので、日本語は勿論、英語も殆ど通じない。学校から帰っても生活は個別のホームステイだから日常のコミュニケーションは、ボディランゲージか仏語の媒介なしには成り立たなかった。

授業は、一同一緒のクラスで、日常生活の場面の挿話から構成される、いわば紙芝居に仕立てられていた。各挿話は、まず、紙芝居の場面ごとにテーブルで会話が流される。1フレ

一ズずつ、こまぎれにして会話が流れる。このこまぎれのフレーズを聞こえた通りにオオム返しに云えといわれる。最初は聞いても音がなかなか聞き取れない。何回でも聞きとれるまで聞かされる。やっと聞きとれたつもりでオオム返しに云ってみても、先生からは違うと云われる。何回も繰り返す。やっとOKが出るまで何十回、テープを聞かされ、云わされるか分からない。その上、10人が順番にこれをやらされるので、皆に迷惑をかけじと、皆、必死で聞き、答えようとする。が、しかし、ことはそう簡単ではない。最初の順番の人は誰にとっても初めてであるので一番苦勞するが最後に近い順番の人ほどそれだけ他人の分を余計聞いているので楽になる。順番は適宜入れ替わるがそれにしても、根気のいる作業ではある。

当時は知らなかったが、人の耳は自然に耳に入ってくる音でも聞きなれない音は自然淘汰され、年齢とともに聞こえなくなるのだそうである。当時の我々は、皆、30代半ばを過ぎた者ばかりであったので、この聞きとりには相当、神経を消耗した。こちらは聞こえた通りに云っているつもりでも違うと云われるのは、発音構造の違いもさることながら、そもそもこの年齢によるハンディが大きかったものと今では考えられる。おまけに、各フレーズ単位のこの聞きとりと発音の繰り返しの時点では、その意味するとところは全く分からないため、耳にしか頼れないため疲れるのはなおさらであった。ただ、ただ、音をひたすら聞いてそして聞こえた通り云う努力を繰り返すだけなのである。

こうして、1フレーズにつき何とか10人が10人も云えるようになると、ようやく次のフレーズに移る。1挿話に20～30の応答場面があるものとして、1挿話が終わるまでのフレーズ数をご想像頂きたい。先生も生徒も相当なエネルギーを要する。やがて、やっとのことで1つの挿話が終わると、今度は、やおら紙芝居の各場面の解説を先生が始めるのである。勿論、英語ではなく仏語にてそれぞれフレーズ毎に解説するのだ。当然、生徒の方は仏語が分かる訳ではないから、紙芝居の絵と先生のいわばパントマイムを見て理解しよう、理解させようというわけである。

先生は、当然、生徒の方はまだ仏語が分かるとは思っていないので、絵以外に他人を呼んできたり、物を持ってきたり、ゼスチャをしたりありとあらゆる手段を使って必死に状況と意味を生徒に理解して貰おうとする。不思議なことに、最初は何が何だか分からないが、先生が必死で努力するうちに、生徒たちは何とか段階を踏んで、最初はぼんやりだが、だんだん理解できるようになるのだ。最初は一人でも最後には皆が分かるようになる。しかしながら、これも各挿話の場面（紙芝居）毎となれば、先生にとっても生徒にとっても1挿話が終わるまでのそのエネルギーたるや凄まじいものだが、今から考えれば理解に苦しめば苦しむほど、分かったときの感激は大きく、その分強く印象に刻まれたのだと思う。

やがて、一つの挿話の紙芝居のすべてのフレーズについて、自分が聞いて、喋った一連の応答の状況と意味がすべて分かって、めでたし、めでたしとなるわけである。やれやれと思っているところに、一つの挿話の締めくくりとしてプリントが配られるのである。ここで、初めて、活字を見ることになる。そして、スペルや文法の解説、名詞や動詞の変化を覚える運びとなる。小生などは、第2外国語で2年間学んでいたもので、日常会話程度であれば活字を見れば、なんだ、この程度の話かと殆どはたやすく理解できる代物であるのだ。ところが、それが最初から活字で見えおけば、テープを聞いてもたやすく分かるであろう内容でも、最初から活字なしでいきなりテープとなると分からないのである。分かる、分からないというよりも、そもそも聞き取れないのである。ここに日本における一般的な語学教育の方法の問題点があると思う。

このようにして日常生活の場面の挿話を繰り返していくのである。日本ではまずは活字から入って読むことから始まり、意味の理解や文法が先であって、聞いたり、話したりするのは付け足しであるかあるいは全く無いのが普通であった。従って、小生が受けた仏語研修とは全く優先順序が逆であった。しかし、小生の仏語は、その後、幸か不幸か実際に使う場面が多くなかったが、定年後の今であっても、仏語は決して忘れるどころか、技術翻訳での読み書きは付き合いの長い英語の方が楽であっても、会話となると付き合いの短い仏語の方が楽なのである。

その理由は、日常会話でも英語の場合は多少とも考えないと出てこないが、仏語の場合は特に考えなくても場面に応じて自然に出てくるからである。やはり、読むより先に聞くことに苦労した紙芝居の場面、場面が効いていて、その状況が理屈抜きで体に染み込んでいくのだと考えられる。まさに、「習うより、慣れろ」ということなのであろう。

ところで、小生の集中研修中の仏語への曝露時間にすると、学校だけで、6時間/日 x 20日/月 x 6ヶ月 = 720時間となる。これを仮に毎日1時間訓練したとしても200日/年として3.6年に相当する。さらに通常で考えられる2時間/週程度だとすると30週/年としても12年はかかる勘定となる。たとえ、日常会話程度といえども、なまじっかの努力ではなかなか話せるようにはならない所以であろう。ましてや、その内容たるや日本では耳からではなく活字からだとなれば、いつまでたってもコミュニケーションのとれるような語学力がつかないのは当然といえれば当然であろう。

さて、「グロービッシュ」¹⁾という造語をご存知だろうか？これはグローバルとイングリッシュを合体してもじったものであるが、英語さえ話すことができればどの国の人もコミュニケーションがとれるほどにイングリッシュがグローバル化しているというのだ。これを書いたニューズウィーク誌のロバート・マックラム (Robert Mccrum) によれば、

今や、英語は、ネイティブで英語を話す4億人を含めて地球上のおよそ40億人の人々、すなわち、恐らくは地球全体の3分の2によって、何らかの形で使われているという。しかれば、日本の英語教育はいかにすべきか。仮に、720時間を中学、高校の6年間に割り当てるとすれば、120時間/年となり、30週/年とすれば、4時間/週となり割当が不可能な数字ではない。英語の日常的な読み書きを必要とする日本人は大卒といえどもそう多くはない。それに引き換え、このグローバル化の時代、外国人とのコミュニケーションを日常的に必要とする日本人は益々多くなるはずである。従って、読み書きに比重をおくかあるいはコミュニケーションに比重をおくかによって個人の選択の余地があっても良いのではなかろうか？少なくとも、これから中学や高校の英語の教師になりたい人にとってはこれらの選択が必須であるといえよう。

しかし、現状では、とにもかくにも、ネイティブの講師はいても、英語でコミュニケーションできる日本人の先生がいないのだから話にならない。速成栽培ではないが、既に、英語を担当している若い教師には思い切って、短期集中研修の機会をどんどん与える政策が必要であると思う。途中でも述べたように、耳は年令とともに聞き慣れない発音は入っても聞こえなくなることを考えれば、こうしたチャンスを与えるのも若いのに越したことはない。また、教師に限らず、外国語でコミュニケーションを取れるようになりたい若者は、苦しくとも短期集中研修が一番効果的であることを改めて知るべきだろう。

ごく最近、ようやく、「グローバル教員養成プログラム」²⁾と銘打って、教員養成のリーダーとなろうとしている教育大学（国立大学法人北海道教育大学）が登場している。ここで育った教員が全国各地で活躍する1日を早く見たいものである。

引用元：

- 1) <http://www.d3.dion.ne.jp/~yoshiyam/newsweek2010.pdf>
- 2) <http://www.hokkyodai.ac.jp/files/00001300/00001392/20141027143516.pdf>